

熊本 SJCD 例会抄録

演題：ショート・アーチとフル・アーチの顎位にズレが認められた一症例

演者：長野靖弘

月日：2013年1月22日

Key Word

1. 臼歯部の咬合支持
2. 咬合圧の分散
3. 顎位のズレ

抄録

患者は、60才、女性で下顎両側大白歯抜歯後、パーシャル・デンチャーを装着していなかったため、左右上顎大白歯が挺出してきた、という主訴で来院した。左右上顎臼歯の咬合平面を整え、上顎臼歯の再挺出と大白歯部での咬合支持域拡大の目的で、下顎両側臼歯部にインプラントによる補綴を提案した。しかし患者が外科に踏み切れず、またパーシャル・デンチャーも拒否したため、ショート・アーチでファイナルレストレーションを作製した。その後、患者にしっかり奥歯で咬みたいという欲求が高まり、インプラント治療を受け入れ、フル・アーチに移行した。

小白歯部までのショート・アーチ補綴では、特に問題はなかったが、大白歯を含めると、口腔周囲筋に違和感を感じると主張されるようになった。そこで再度、CRとICPの診査をアンテリア・ジグを用いてゴシック・アーチを描記することで確認した。

その結果、タッピングポイントとアペックスに水平的なズレは見られないが、前後的に若干のズレが認められた。そこで模型上でシミュレーションし、咬合調整の範囲内で修正可能であると診断したため、咬合調整を行うことで前後的顎位を一致させることとした。

6ヶ月経過して前後的ズレはなくなってきたが、均等な咬合圧の分散までは与えることができていない。現在も、継続してセントリックで同一咬合平面上での均等な接触、側方運動時は適正な作業側の接近度合い及び平衡側の離開度合いを与えるべく、模型を用いながらの口腔内での咬合調整を継続して行なっている。

ショート・アーチのまま咬合再構成を行うとフルアーチと比較し、臼歯部に咬合支持がないため、若干、前咬みの傾向になるものと考えられる。咬合を安定させるためには、フルアーチでの補綴、つまり、大白歯での咬合支持を含めた咬合の安定を行うべきである。

諸先生方のご指導、よろしく申し上げます。